

武者小路實篤選集

第七卷

武者小路実篤選集 第七卷

青銅社版

武者小路実篤選集

第 7 卷

昭和40年 2月27日 初版発行

検 印

定価 六八〇円

著 者 武者 小路 実 篤

発 行 者 真 鍋 謙 二

本文印刷 三恭印刷株式会社

口絵印刷 京橋原色版印刷所

製 本 石 津 製 本 所

東京都新宿区納戸町五番地

発 行 所 図書出版 株式 青 銅 社

電話 二六〇局 八七六五番
振替 東京 三四、八九二番

printed in Japan ©

序

我等は生まれるべくして生まれたものだということを自分は認めないわけにはゆかない。そして人間は人間がつくったものではない。我等はつくられたままに生きている点で、他の生物と少しもちがいない。ただ我等は人間として生きることを命じられているのだ。そして人間のつくられ方の複雑と微妙さに僕は驚嘆するものだ。かくの如きものがつくり得るものを我等は信じないわけにはゆかないのだ。我等の想像し得るもの以上のものがつくり得たとしても不思議はないと思う。かく考える時に、我等を支配するものは我等を生んだものであり、その意志を我等は人間として生かすためには、人類の意志というものが存在していいはずと僕は思うのである。我等は古今東西の人が同じ意志と感情に支配されて生きていることを信じないわけにはゆかない。

彼等を感じさせることは我等も感動するのである。

彼等の発明したまた発見したものは、我等も利用出来るのだ。また彼等の経験して来たことは我等も経験出来るのだ。彼等も人間以外でなく我等も人間以外ではない。人間には共通な感

情があり、心があり、意志がある。人類は同じ目標に向かって進みつつある。我等をある所に導こうとしているものがある。我等の内心の要求には共通なものがある。境遇はちがっても目指す所は一つでなければならない。すべての人間は生きようとしている。その生きるのには何か理由と目標がなければならない。その目標に向かうのが我等の意志、と僕は信じている。この意志に従って生きれば、我等は生き甲斐を感じることが出来るものと思っている。この考えは今も以前も変わっていない。この本は十数年前にかかれたものだ。その十数年の間に我等はいろいろの経験を経て来た。しかし自分の考えは変わっていないのである。寧ろますます自分の考えに確信を得て来たと言える。

だからこの本も以前のままの形で書きなおさずに出すことにした。

ただ自分はますます自然を信じて来た。生きるも死ぬも自然の意志に任せればいいのだと思っている。ただ人間は生長しきり、花を咲かせるだけ咲かせ、実を結ばすだけ結ばせばいいのだと思っている。

委しくは本文を見てほしい。(一九五一・五)

武者小路実篤選集・第七卷

目次

人類の意志について 7

論語私感 143

「我が懺悔」を

中心として見たトルストイ 413

「白樺」の運動 451

解題……………中川孝

題字・武者小路実篤

人類の意志について

前 編

一

「人間は何のために生まれたのか」

こう聞かれたら、自分は

「人類の意志を生かすために」と答えるであろう。

「人類の意志とは何か」と聞かれたら、

「人類が完全に向かって生長する意志」だと答えるであろう。

「なぜだ」とその人がなおきくなら、

「この本を読んでくれ、これが僕の答えだ」と僕は答える。

二

人間は生まれたのだ。自分が生まれたくって生まれたのか、生まれたくなくとも生まれたのかは知らないが。しかし生まれる意志があって生まれたのだと思う。生命力が内に働いて、盲目的に生きよう、生きようとしてい

る力から、遂に人間というものが生じたのだと思う。

不思議にはちがいないが事実だから仕方がない。

生命があれば自ずと動物が生まれ、動物が生まれると自ずと目が生じる。

「どうして目が出来たか」僕には不思議に思える。しかし「生命」は澄ました顔して言うであろう。

「見るためさ。生きるには見る必要があるからね」

それが僕には不思議なのだ。

「もしそれが不思議ならば生命そのものが不思議なのではないか。単細胞動物が生まれた時、既に人間が生まれることは約束されていたのだ」

「不思議だ」

「あたりまえなのだよ。ただお前にわからないだけなのさ」

三

不思議なことはいくらでもある。だが實際存在するものを否定することは出来ない。不思議でも事実は事実なのだ。

人間に目があるのが不思議なら、人間に鼻があるのも不思議、耳があるのも不思議、口があるのも不思議、神経のあるのも、内臓のすべてのものも、毛髪の生ずるのも、脳が存在も皆不思議である。しかし不思議と思う方がへんなほど、これ等の存在は事実なのだ。あたりまえのことと僕達は思っている。また本当のことがわかったらあたりまえになるのだらう。

だが不思議でないとは言えない。

しかし僕はその不思議さについては何も言おうとは思わないのだ。

むしろ事実ありのままを見ようと思うのだ。そして人がそんなものの存在を信じないものでも、事実あれば僕はその存在を信じるものなのだ。

「人類の意志」の存在なぞはその一つかと思う。

四

なぜ人類の意志の存在を信じるか。

我等を支配するものは我等の本能であり、また我等の生きようとする意志である。

この本能の存在も不思議なものの一つであるが、事実だから仕方がない。

僕は学者でないから、一々学術的用語をつかうことは出来ない、またその興味もない。僕は学者のためにこの本をかいているのではない。自分と同じくこの世に充実した生き方をしたい人のためにかいているのだ。用語よりも事実の方が僕には大事なのだ。

僕達がこの世に生きてるのは本能があるからだ。その点他の動物とそうちがわない。食いたいから食うのだ。飲みたいからのむのだ。性慾があるから子供を生むのだ。生きたいから生きているのだ。少しも死にたくないから生きているのだ。我等が生きているのは義務からでもなく、理性があるからでもない。本能があるからだ。理性の支配に屈伏しきれない本能が我等を生じ、我等を生かしているのだ。しかし我等はそれだけではない。

しかし本能があるということは大事なことなのだ。そしてその本能は我等がつくり出したものではなく、先天

的に持つことを強いられているのだ。

人類は何のために生じたかわからないが、生きるために必要な用意が実に抜け目なく出来ていることは認めなければならぬ。

これは人間に限らない。

水中の生活者の魚、空中を飛びまわる鳥、地上を走る獣類、皆、必要に応じて実によくつくられている。

しかし人間は彼等よりももう一步、上等につくられている。その一番の特色は何か。

いろいろあると思うが、僕の考えでは——決して珍しい考えではないが——人類になって始めて一人の経験が一人の経験で終わらず、誰でも人間の経験したことは、他の人間に伝えることが出来る点だと思う。

他の動物は他の仲間から教わり得るものが実に少ない、もし教わり得るものがあるとしてもその範囲は少ない。彼等は大部分本能だけに支配されている。しかし人間は食物をつくることも、家をつくることも、着物をつくることも、他の人の教えを受け、また他の人の苦心と労働の結果によって得られているのだ。

人類は長い歴史を経て今日の文明を生み出すことが出来たのは、他人の経験を自己のものにすることが出来、また自己の経験したことを他人のものにすることが出来る能力があるからだ。互いに教え合うことが出来、互いに協力することが出来、お互いに利用しあえ、お互いに得たものを交換し得る等、人間に自分一人で得られる力は少ないが、何千年の間、何億万人が生きて来た結果を生かすことを知っている点で人間は地上を征服することが出来、今後どこまで発展するかわからない能力と運命を持っているのだ。

そしてこの能力を無限に生かしたがついているものを僕は「人類の意志」と呼ぶのだ。

五

他の動物にも群居するものは沢山いる。協力するものも、低度ではあっても社会的生活を実行しているものもある。ある蜂や蟻の世界ではその点人間より進んでいると言えるかも知れない。しかし他の動物と比較する必要はないが、人間ほど、自分達の生活のために、あらゆるものを利用することが出来る動物は他にいないであろう。少なくとも人間は実に自分を生かすためにあらゆるものを利用出来る動物なのだ。それは各自がそれが出る力をもっているからでもあるが、その力が散り散りに生かされるだけでなく、その力が集まって人類全体を進め得る力を持っているからである。

しかし僕はここらで少し独断的な言い方を許してもらうことにする。あとになるに従って、なぜそう言うかはわかると思うが。

六

僕はこう思っている。人間の生活においては個人の生命はそのものために存在するのではなく、人類全体の生長のためにあるのだと。

これは結論ではないのである。我等の生命の目的でもあるが、同時に基礎でもあるのだ。我等が生まれたのも我等自身の生命のためではない。また我等の死ぬのも我等自身の生命のためではない。人間には誰が生まれてもいいのだ。しかし誰かが生まれなければならないのだ。そして生まれたものはこの地上でなすべきことをすることを命じられているので、そのなすべきことをしさえすれば、死んでもいいのである。なすべきことをせずに途

中で死ぬものだけが、死にたがらないのだ。自分はそう思っている。

甲が必ず生まれるというものではないのだ。人間が生まれるというのは富籤にあたるよりもなお偶然なのだ。殆ど比較にならないほどのまぐれあたりで人間は生まれるのだ。このことは言うまでもないことだが、二つの事実を言えば、人々は今さらに自分が生まれたことに驚くだろう。

「両親が結婚（野合もふくむ）しなければ汝は生まれないのだ。両親のまた両親が結婚しなければ汝は生まれないのだ。両親の両親のまた両親、こういう風につきつめてゆくと、人間の元祖にまでゆく、そして人間以前の生活につづく、そのうちの一つがかけても汝は生まれないのだ。このことは想像以上のことではないか、それでも汝は生まれるべくして生まれたと言い得るか」

それ以上次の事実はどう考える。

「汝の父親のうちに生じた精虫の数はどのくらいか、そしてそのうちからこの地上に生まれ得るものは何人か。しかもその半身、母の胎内の卵と合致し得て生まれることを考えたらどうか。それがまた先祖からずっとつづいて行なわれて来たことを考えてみたかどうか。人間が生まれた以上人間が生まれることは当然だろうが、汝が生まれたことを当然だと主張することが出来るか。個人の生命はそれほど偶然に生まれたものだから、あまり価値を主張することは出来ないと思うが、汝は出来ると思うか」

「出来ないと思います」そう言うより仕方がないように思う。

しかし生まれたものは生まれたのだ。そして生まれただけのこととはしなければならないのだ。しかし個人が目的ではないのだ。しかし個人を無視したり、軽蔑したりしていいと言うのではない。個人の生命は尊重されるべきものだが、それは切りはなされた個人の生命のためではない。